

# 「老いの過程」に同行すること ——ある介護職員の語りから

久保田 美 法\*

## 要旨

高齢者支援では、機能の維持・回復という視点とともに、「老いの過程」に同行する視点も重要である。本稿は「老いの過程」とはどのようなものかを、日々高齢者と接し、生きることの基本を支えている介護職員のリアルな語りに学ぼうとしたものである。

インタビューを依頼した介護職員は、様々な事態の対処に、日々試行錯誤であたりながらも、「老いの過程」が進んでいくのは自然なことと感得されているようであり、それは語り手が語った、風雨のような自然現象に動じない高齢者の姿とも重なるように思われた。また高齢者とできるだけ「楽しく」過ごしたいという思いは、「老いの過程」をつぶさに感じながら、日々を共にしているからこそ培われる「家族ではないが家族のような」関係性の中で生まれていることが推察された。その内実や重みを踏まえて、日常的な存在ではない心理職は何をなしうるか。その可能性についても、併せて小さな考察を添えた。

**キーワード：**日常のかかわり、認知症、看取り、自然現象としての「老い」、心理職の役割

## はじめに

2019年度より公認心理師資格が始動し、心理職がこれまでより様々な領域で働く可能性がでてきた。現在、福祉分野に従事する心理職は少なく、その領域も、児童福祉や精神保健福祉が主で、高齢者福祉にはほとんどいない。その要因として、高齢者分野では、介護などの直接的な支援や個人の身体的機能に対する支援という意識が強いこと、またすでに社会福祉士等による相談援助業務が行われていて、心理職の必要性が認識されにくいこと、認知症などにより、従来の心理面接のような言語的コミュニケーションが成立しにくいこと等が指摘されている（平野, 2018）。しかし、老いが進み、あるいは言葉が不自由になることが、すなわち心がなくなることの意味する訳ではないだろう。むしろ、だからこそ、その心の声は耳を

---

\*総合福祉学部 准教授

傾けられるべきかと思われる。

高齢者支援では、心身機能の維持・回復という視点と、老いてゆく道のに同行するという視点の両方が必要である（進藤, 2001）。この「同行」には心理的な面も伴うと考えるのが自然だろう。もちろん、相談援助や介護業務の中でも、心理的ケアが行われていることはあるだろう。心理的ケアは何も心理職だけがなしえるものではない。

長年、認知症高齢者を診てきた医師の小澤（1998）が「そもそも人は理解が届かなければ人と関係を結び、人を慈しむことができないわけではない。食べる、排泄する、衣服をつける、そういった日常生活への援助を日々続ける。そこから『ただともにある』という感覚が生まれる。共に過ごしてきた時間の重なりが理解を超えるのである」と述べているように、日常生活への援助は非常に奥深いものでもある。また看護師の西川（2007）は、「もう帰らせて頂く」とつぶやいた認知症高齢者がひとまず落ち着くまでの過程で、何人かの職員や周りのお年寄りからの声かけ、夕暮れの光や夕食の匂いなど、小さな数えきれない様々なケアのかげらの積み重なりがあったことを描写し、それをパッチワークをもじって“パッチングケア”と呼び、こうしたケアは相手を息苦しく包み込んでしまうことがない、と述べている。

このような日々の日常生活の援助や、それとなくかけられた声の数々は、とてもさりげないもので、とりたてて「心理的ケア」などと呼ばれることはないものかもしれない。しかし、ケアとも言われえないような小さな営みが、高齢者の心にとっても大切なはたらきとなっていることはあるに違いない。

高齢者の心理臨床は、面接室を訪れることの難しい場合や言語的やりとりが困難になる場合等、通常の心理面接の枠では行えないことも多く、未開拓なところもあり、まだまだ様々な試みが必要な領域である。筆者自身、アウトリーチ型の小さな試みをこれまで行ってきたものではあるが（久保田, 2020）、いずれにしろ、すでに広く行われているであろう福祉の現場ならではの心理的ケアについて、一度きちんと知る必要があると考えようになった。心理職がなしうることもあるとすれば、それを踏まえてあらためて考えていくのがよいのではないか。

現在、高齢者分野で働く心理職の主な職場は病院で、その業務も、認知症の心理アセスメント等に限られていることが多い。しかし厚生労働省によって地域包括支援システムが推進されている現在にあって、今後は「治療」を主な目的とする病院のみならず、高齢者の「生活」の場にももっと目が向けられるべきかと思われる。そもそも「老いの過程」とはどのようなものであり、それはいかに体験されているものなのだろう。それを高齢者福祉施設という「生活」の場で暮らす高齢者と、その傍にいる介護職員との両者に聴き、そこから、高齢者福祉施設における心理職のあり方を模索していくことはできないだろうか<sup>1)</sup>。本稿はこのうち「介護職に聴く」の第一弾の報告とその考察である。

## I. 高齢者施設でのインタビュー

「老いの過程」をつぶさに知るために、まず、ある特別養護老人ホームの介護職員にインタビューを行い、高齢者と長い時間を共にしている介護職員は、その日常の中で「老いの過程」をどのように捉え、感じているかを聞いた。

対象とした特別養護老人ホームは、ユニットケアという、少人数のアットホームな雰囲気の中で、個々の入居者がその人らしく生活するために必要な居場所の理解を大切にしている施設である(林, 2018)。ユニットは10の個室とリビング等の共有スペースからなり、入居者は日中はリビング等で過ごされていることも多い。入居者の内、通常の会話は可能な方が約半数、認知症の軽度者が2割程度で、中度及び重度者が中心であり、ほとんどの方が車いすを使用している。平均介護度は4.1、平均年齢が90歳、最高齢は102歳、90歳以上6割強を占める。またこの施設はクリニックを併設しており、看取りケアも行われていることも特徴として挙げられる。

まずは試みに、大学院で心理学専攻修了後、この施設で介護職に就いて8年目となり、現在はユニットリーダーとして働いている女性1名に継続的なインタビューを行った。インタビューは、当初月1回を予定していたが、日程の都合上、1年間で計6回の実施となった。各回は90分程度で、特に質問項目を用意しない非構造化面接とし、会話は了解を得て、ICレコーダーに録音した。

インタビューイは非常に協力的で、心理学専攻出身であることもあってか、ユニットという高齢者の生活の場における様々な人間関係(職員と入居者、複数の入居者同士のかかわり、職員同士、あるいは職員と入居者のご家族とのコミュニケーション)について、生き生きと語るとともに、ユニットリーダーという立場から、それら全体を俯瞰してみるまなざしもうかがわれた。また高齢者の様々な身体的変化や「帰宅願望」をどのように捉えて寄り添っているか、看取りの過程や入居者が亡くなった後の思いなどについても語られた。

インタビューの中でしばしば登場し、印象的だった言葉の一つに「楽しく」がある。これは今回のインタビューイに限らず、筆者の知る限りでは、他的高齢者施設でも福祉職の方の姿勢として感じてきたものでもある。それは、「老いの過程」を日々どのように感じているかと表裏のものでもあり、そうした中で生まれてくる工夫や思いであるようにも感じられる。もちろん、そこに込められた思いは人によって様々であろう。本稿では今回のインタビューイの語る「楽しく」の意味に耳を傾けてみたい。

インタビューイの語りは、具体的な日々の営みの中で、入居者の“今”を様々な感じ取りながら仕事をされていると感じられるものであった。それを聴き手(読み手)であるこちらを感じ取れることが重要であると考え、語りに流れている思いや雰囲気も伝わるように、次節では語りをなるべく逐語のまま示す。

尚、筆者は以前からこの施設には、こちらからお願いして定期的にお邪魔し、入居者の方のお話を伺ってきたが、このインタビューーには、介護職に就いて1年経った頃にも少しインタビューをしたことがあり、今回その記録をあらためて読み直すと、「楽しく」ということについては当初から語られており、それは今回の語りとも通じているものと考えられたので、当時の語りもあわせてここに示すこととする。

インタビューをいずれ研究としてまとめることは、施設長とインタビューーの了解を得て開始しており、また本稿執筆にあたっては、あらかじめ以下に挙げる逐語に目を通してもらい、掲載の許可を頂いている。

## II. ある介護職員の語りから

前節では「インタビュー」と表記したが、非構造化のそれは、その時々によって、行きつ戻りつ、様々な話題がのぼり、インタビューー曰く「おしゃべり」のようなものであった。しかし「おしゃべり」という形で自然に語られる方が、日常の思いは汲みとれると考えたため、そのままの形で実施した。そこで本稿でも、「インタビュー」というより「語り」という表現の方がしっくりくるため、これ以後は「インタビュー」ではなく「語り」と記載し、「インタビューー」のことは「語り手」と記すこととする。

本節では、語り手が「老いの過程」をどのように体験しているかがよく表れていると考えられたものとして、食事・排泄・入浴等の介助とともに、TVを一緒に見たり、何気ないおしゃべりを楽しんだり、入居者と「一緒に」日々どのように過ごしているかが語られたもの、次いで、ユニットの多くを占める認知症高齢者とかかわりについて語られたもの、そして看取りの過程について語られたものの3つの語りを挙げる。尚、次節からの語り（フォントを変えてある箇所）のうち、地の文は語り手の言葉、〈 〉は聴き手の言葉である。

### 1. 「今が楽しめたらそれでいいじゃないか」

高齢者っていうと、やっぱりゆったりとしてるという感じ。子どもだと、人見知りの子とかにはこっちから何かしなくちゃいけないと思うけれど、お年寄りっていうのは、無言でもいいのかなっていうのが、まず思いますね。昔で言うと、縁側でぼーっとしているような。それが第一段階の寄り添いなのかなって。

〈ユニット、何か楽しいな雰囲気〉そうですね。うちは“まず自分が楽しくないと”っていうのがある。自分が楽しくないと、介護が雑になる。そうでないと、着替え、着替え、着替え（とひたすら次々と着替えの介助をただこなす）みたいな…

例えば食事の時間をどれくらいかけるか。私なんか（様子をみながら色々声をかけたり、入居者とおしゃべりをしたりして）長くなっちゃうんですけど。

やっぱり教科書とかで「ここはこうする」って書いてあったり、「これはダメ」と書いてあっても、人が相手なんで、その通りにはいかない。ダメと書いてあることが、それしかダメな人もいるし。教科書には「尊厳」とか「敬語で」とか書いてあるけれど、うちのユニットはあんまりそういうこと求めてる人はいない。孫みたいな感じの方がいいんじゃないかな。

“やってあげたくなる関係性”っていうのが、この一年でできてきたように思う。“やってあげる”っていうのは、たぶん違うんだろうけれど、やってあげたいっていうか、気になるというか。

小さな変化に気づく。いない時に部屋をのぞいたり ゴミが散らかってたり、水がそのままだったら（自分で管理ができにくくなってきた）かなとか。でもそういう時にそのままは言わない。人にもよるんですけど。おむつとかバットとかが減ってきてても、「最近なんか足りないもんじゃない？」とか聞いたり。「入れといたよ」だったら10秒で終わるところを1分くらいとかかかるけど。余裕がある時ですけど。

自尊心というのがあるから。これまで出来たことが、出来なくなる。それをこちらがやる回数が増えてきたら、そういうことでも傷つく人もあるかもしれないし。

Aさんとかは出来ないんじゃなくて、面倒くさいから「やって」っていう感じ。自分でも出来ないことはないんですよ。でもなかなかスムーズには出来なくて、「じゃあやって」みたいな。でもそれは「意欲の低下」ではないだろう。“あの人ならやってもらえる”とか、そういうものもあるし。やれないのか、やりたくないのか…。

〈出来る／出来ないと二分されてるんじゃなくて、その間が〉そう。白と黒じゃなくて、グレーがある。そのグレーも濃いグレーと薄いグレーとあって。

Bさんは、前はもっと怒ってて。杖振り回したりして、危ないんで、他のみんながもう一つのユニットに移動したってこともあったらしいですよ。でも、危ないことがなければ、別に怒ってたっていいんじゃないか。すぐに介入するとかじゃなくて。いつまでも怒ってるってことはないんだから、そのピークを見計らって、介入する。行ってみて、あ、まだ怒ってたっていうこともあるけれど。

徘徊する人とかでも。別に歩いてたっていいんじゃないか。運動にもなるし。Cさん、前はよく歩いてた。言葉はやっぱりあんまり出さなかったけれど。その時も。職員の間で、「あ、今そっち歩いてるよ」「分かった」とか（声かけあって見守っていた）。だから、リスクとかは考えなくちゃいけないけど、見守ってたらしいんじゃないか。限界までは。

デメリットをメリットに変えたらいいんじゃないか。今が楽しめたらそれでいいんじゃないか。ふつうは過去から今につなげてってするかもしれないけど、「じゃあ、今度それしようか」って、未来につなげれば。（それでいいっていう）確信はないですけどね。何が正しいとかって、分らない。でも笑ってたら、それは楽しいってことなんじゃないか。ちぐはぐでも。こっちが投げたボール、全然違う方に返ってきても、こっちがそれに乗ってくとか。それもずっとやってられるわけじゃないですけどね。そうしない時（仕事がいっぱいとか疲れてる時など）もありますけどね。ま、今日はいつか、みたいな。もともとそういう性格っていうのもあるかもしれないけど。

レクとか体操とか、もっと考えたらいいのかもしれないけど。でも月1回外出レクっていても、みんなが毎回行けるわけじゃないんで。例えば買い物に行くのが楽しみな人でも、それが出来ないんだったら、じゃあ（今ここで何が楽しみになるか）。

教科書に書いてるみたいに敬語とかにすると、なんか形式的になる。家族の人の前とかでは使わないけど、あだなっていうか、そういうのになることもあるよねって（職員間で）言ってる。

若者言葉で言うと“いじる”。それでいいのかなとも思うけど。〈でも、こっちの都合や楽しみだけでやってる感じはしない〉そうですね、やってみて違くなって思ったら、やめてるし。

（入居者から）「私はずっと死ぬまでここだけど、あんたたち（職員）は（いずれ異動で）どっか行っちゃうんだよね。バラバラになっちゃうんだよね」って言われて。「じゃあ（その時は）同窓会やろうか」とかって。じゃあ場所はどこがいいとか、「でも〇さん、座れないじゃない」って言ったら、「私はこれ持ってくよ」とか、そんな話ができる関係性。こころも丸裸になるから、こっちも丸裸になる。過去のこととかは分からないけれど、今この瞬間は。

“一緒に生活している”という感じ。〈家族みたいな？〉今はまだ友達という感じだけれど、それがそのうち家族になっていくのかな。家には帰るけど、ここに来てる時は一緒。

家族が来たら外には出れるけど、そうでないと、TVか私たちしかいない。私はとにかく一緒に笑ってたいなっていうのがあるんで。

（最低）ラインを低めにとっておいたら、驚かないでしょ。「この人は穏やかな人」って最初に思って、それをベースにしていると、そうじゃない時にこっちがパニックになるけど、笑顔の時もあれば、般若みたいな時もあるよ。Bさんなんて、本当に（いろんな時がある）。怒るし笑うし泣くし。怒りながら、泣きだしたり。涙は出てないんだけど、感情としては泣いてる。

私はざっくりなんで、それ以上は考えない。でも人（職員）によって、どこが深くっていう



のは違うかなと思う。それ(深いところ)が一つじゃないって人もいるし。

以前は自分で歩いていた人が車椅子になる。自分のトイレにおむつのストックが減ってきても、気づかなくなる。部屋の様子にほつれが見えてくる。「老いの過程」では、こうした大小様々の変化が、時にゆっくり、時に急激にやってくる。これまで当然一人で出来ていたことが出来なくなる。それは「機能の低下」によるのか、あるいは「意欲の低下」によるのか。それによって必要なサポートも異なってくるだろう。

しかし、できていたことをやらなくなるのは、必ずしも「機能の低下」や「意欲の低下」とは限らない。億劫になってきたところはあるとしても、そこには意地やプライドや恥ずかしさが絡んでいたり、「やって」という言葉にも、ある種の甘えや横着のようなものが含まれていることもある。それらをその時々、どのように受けとり、どのように応えていくか。それはそのまま、その時々の入居者の思いを汲みとりながら、その心を支えることでもあり、これ自体が繊細なコミュニケーションでもあると考えられる。

語り手は、何度となく「教科書とかでは」「普通は～かもしれないけれど」と言っていたが、「白と黒じゃなくて」「グレーも濃いグレーと薄いグレー」があるといった微妙なところを感じとろうとする姿勢からすれば、高齢者のある状態を「意欲の低下」と、いわば一律に判断することは、実際に即していないということになるのだろう。

語りの中でしばしば出てきた「～だったらいいんじゃないか」という言葉は、そうした一律的な捉え方や、“こういった時はこのように対応するとよい(～すべき)”といったやり方を、やんわりと切り返し、あるいはその時の高齢者の様子を、できるかぎりそのまま肯定しようとする姿勢の表れであるように思われる。

ユニットという小人数単位であるとはいえ、集団生活の場面で、激高したり、徘徊する人は、何とか宥めて落ち着いてもらおうとするのが「普通」であるとすれば、それに対し語り手は、本人がそれでよければ、危険でなければ、あるいは楽しければ、怒っても、徘徊しても「いいんじゃないか」と言う。もちろん、それには“ここまでは大丈夫だが、これ以上は危い”というラインはあるようだが、それはあらかじめ明確に決められている訳ではない。“この人の場合、そのラインはどこにあるのか”をその都度探りつつ、今はそのラインからすると、どのあたりの状態かをその時々でみているようでもあった。

そのように微妙なところを絶えず感じとりながら、できる時にできることができるだけできればいい。できなくても、まあいいか。今日はそれでいいと思う。どのようで“なくてはならない”のではなく、それで「いいじゃないか」。このように、色々な思いや状況を、いわばそのまま包む雰囲気として、語り手の言う「楽しく」はあるのかもしれない。「今が楽しめれば、それでいいんじゃないか」は刹那的ともとれるが、その時、その時をいかに“いい時

間”にできるかという工夫は、「老いの過程」に彩りを添え、生気を与えてくれるものとも考えられる。

そこには、ちらっと出てきた「月1回の外出レクもみんなが行けるわけではない」「家族が来れば外出できるが、そうでなければTVと私たちしかいない」といったような、変化や刺激は少ない日常に対する思いもあるだろうし、「楽しくなければ介護が雑になる」——そのような可能性は常にいくらでもあるということかもしれない——という思いも関係しているかとも思われる。

しかし「笑っていれば楽しいってことじゃないか」と言いながら、語り手はBさんについて「怒るし笑うし泣くし。怒りながら泣きだしたり。涙は出てないんだけど、感情としては泣いている」と言い、あるいは「般若にだってなるよ」と言われ、人間なら誰でももっているであろう様々な感情がそのまま出ていることに、共感と魅力を感じているようでもあった。

激しく怒っている時は、早めに介入しておさめた方が、介護者としては楽かとも思われるが、しかしそれでは「楽しく」はないかもしれない。語り手の言う「楽しい」は、実は「笑っている時」のみを指しているのではなく、喜怒哀楽をひっくるめて、お互いがそれぞれの感情をそのまま出せる状態のことなのではないか。何のてらいもなくお互い「こころも丸裸になる」。そこにこそ、介護の醍醐味はあると言われているようにも思われた。

## 2. 「何がね、ほんとかは分からないですけど」

季節の変わり目は体調不良ももちろん多いですし、もちろんそれに伴って精神状態も変わったりもします。なんででしょうねえ。夜でいったら、起きる回数が増えたりとか、全く寝なかったりとか。それで日中すごく眠くなっちゃって不眠とか、多弁とか。あとはいつもはそんなことないけど、幻覚みたいなのがみえたりとか。「あそこに犬がいる」とか“中継”してくれたりする。どうなんですかね。もう何かがそう見えてるのか、本当にそう見えてるのか分からないので、「どこに？」とかたぶん聞いたら、すごい説明してくれる。

Dさんはなんていったらいいか、会話にならない発語が多かったりします。この話したら急に違う話したりとか。寝たかなと思うと急に笑いながら起きたりとか。夢みてそのまま起きたのかなとか、あとはいつもと違う行動したり、車椅子から急に起きたりとか。

こっちが「右向こう」とか言っても、あんまり耳に入っていないのかな。ハイテンションで。何言っても聞こえないのか、聞こえても入ってこないのか、わかんないですけどね。だからその、やられる（右向かせようとされたりする）ことが嫌で、それを払う手が、こう結局“暴力行為”につながったりとか。Dさんからしたら「何するのよ！」なんだけど、それが介助者からしたら“抵抗”みたいにとれるんで、記録には「抵抗した」「暴力行為あり」とかになっ



ちゃうんですけど。

そういう時はすごい力。そうですそうです。細い腕で。ありますあります。Tシャツの上からひっかかれたのでも、家帰ってみると擦り傷になってたりとか。しますします。怒ってる時は爪立てるんで。どんなに切ってあっても、爪が入っちゃうんで。

あと噛みつかれたりもする。手も足も出なくなると、人間って口で噛む。本能だと思えますけど。場合によっては無理にでも押さえないと、本人もケガさせちゃうし、こっちもケガしちゃうみたいな場合があるんで、ちょっと無理に抑えることもあるんですけど。そうなる、口で噛む。もう半分青あざみたいになったりとか。そういう時になるとバカ力。

怒る時もあります。こっちも人間なんで。結局このことが終わらないと次の人（の介助）に行けないとか、時間内に終わらないとかなっちゃうと、“そうしてよ”みたいな感じになっちゃう。やり方も言い方も。そうすると（相手は）ますます受け入れてくれないので。

Dさんはもうがっつり認知症の方かなと思いますけど。ちょっと前の、自分で歩いてた時はあんなに笑わない人だった。うーん、でもちょっと垣間見えるひょうきんはありました。でも息子さんから昔のDさんの話を聞くと、“だいぶん違いますよねー”な感じにはなります。だから自分で歩いてた時期は、ちょっとトイレに失敗があった時でもなかなか（職員が）入れなかったり。歯磨きもたぶんしたことない。入所されてから、こちらが用意して誘導すればできるんですよ。だけど用意して誘導するってのがなかなか入りにくかったんですよ。

たぶん骨折されて入院してから、認知（症）もだんだん進んできて。病院ではおむつとかになっちゃうんで、否応なしに介助入るじゃないですか。だからたぶん介助慣れされて帰ってきた。たぶん、とんとんとって認知（症）が進んだのもあるんですよ。ただ、進んですごい拒絶する人も中にはあるんで、私たち介助側からするといい意味で認知（症）が進んだ。“開花”したんでしょうね。

〈結構「ありがとう」っておっしゃる方？〉ああ、Dさんはだから退院されてから「ありがとう」って言われるように。〈その前は〉あんまり。何か“ああ、めんどくせえ”みたいな。お風呂もいちおう週に2回組まれてるんですけど、嫌いだったんで、週に1回入れてるくらいだったのが、「お風呂大好き〜」とか言って。「うそうそうそ〜！」みたいな。入れるの大変だったじゃん〜。どうなんですかね。だからDさんに関しては何がね、ほんとかは分からないんですけど。

「老いの過程」の中でも、認知症は「分からない」ことが多い。本人が、親しい人や自分の名前、これまでの関係性や歴史が「分からなくなる」。のみならず、今、目の前にある状況が「分からなく」なり、それに適ったふるまいも「分からなくなる」。幻覚が見えているようだった

たり、夢と現実の境目が曖昧な時、その高齢者の思考回路は、どのようになっているのだろうか。何が見え、何が聞こえているのだろうか。その傍にいる語り手からも「どうなんでしょうね」「何ででしょうね」「わからないですよね」という言葉がしばしば出てきた。

トイレや入浴は、本人が嫌がろうと、その必要性が分からなくなっていようと、全くそのままにしている訳にもいかない。しかしその介助を頑として受けいれようとはされない時の語りからは「そうですそうです」「ありますあります」と、切迫感、緊迫感が伝わってきた。そうした時は、いつものDさんならDさんとは全く違う形相に、“人はこのように変わるのか”と、人間の本能の表れに、どこか震撼とするような感覚もあったかもしれない。

入居者からすれば「何するのよ！」という意味でも、爪でひっかかれ、噛みつかれ、あざができれば、端的に痛いはずである。自分もできるだけ傷つかず、その入居者がケガをすることのないように、またほかの入居者の介護にも支障がないようにと、切迫した状況の中で、様々な葛藤やせめぎあいがあるだろう。しかし、本当に困った状況であったことは間違いないだろうに、そこには“困っている”だけではない何かもあるようだった。それは一体何だろうか。

認知症ではまた、思いがけず突き抜けたような人格の変化がみられることもある。息子によれば、厳格できちんとした母親であったというDさんは、一皮むけたように、まさに「開花」という表現がピッタリのような、ひょうきんな人となった。なぜこう変わられたのだろうか。そこには不思議さが漂う。

入浴を嫌がっていたDさんが病院から戻ってきたら「お風呂大好き～」と言うようになったことに対する「うそうそうそ～!」「入れるの大変だったじゃ～ん」という言葉からは、素直な驚きと、“よかった～!”と、これまで大変さも吹き飛ばすような喜びが感じられた。今までのお風呂嫌いは一体何だったのか。そう思わないこともないかもしれないが、それ以上に「お風呂大好き～」というDさんを驚きながらも迎え入れ、入浴を楽しめることを一緒に喜んでいるように感じられた。

なぜ今まではこうだったのか、なぜこのように変化したのかは、分からない。不確かさの中で、常に試行錯誤しながら、その都度の対応はもちろんされているが、切迫した時も、“開花”したことも、何なんだろうとは思いつつ、必ずしもそれ以上、それが何によるのかを、語り手は分かりたいと思っているわけではないようである。なぜこのように変わるのかは分からない。けれど、分からなくても、それにつきあっていく、ついていく。ついていくしかないということかもしれないが、それはそれでいいということなのかもしれない。

ユニットで入居者が「分からなくなっちゃって…」と、情けなさそうにつぶやいたのに対し、語り手が「いーんだよ」と返していた場面を見かけたことがある。分からなくなったら、分からなくなっただけで“いいんじゃないか”。分からないことを分かってもらうよりも、分から

ないことは分からないままに、不思議なことは不思議なままに、ただただつきあっていく。そんな姿勢が、そこからも垣間見えるように思われた。

### 3. 「看取りは、もうその人とずっとそこにいたって、いいと思う」

看取りは、それまでの過程がすべてだから。お風呂と一緒にいった時、ああ言ってたな、廊下で2人で歩いてた時に、ああ言ってたなとか。

家族が来た時に聞くんです。子どもの時とか、若い時、結婚してからとか、仕事のこととか、認知症になってからとか、何が好きとか。

(そういったことを覚えておいて)もう寝たきりになっちゃった人の部屋を、勝手に模様替えしたりとか。大体ベッドは壁につけてあるけど、(部屋の)真ん中にもってくると、両方から見えるし。こっち向くと家族の写真、あっち向くと犬の写真が見えるようにするとか。「こんな景色が好きだった」とか聞いたら、その写真、壁に貼ろうかとか。家族が嫌がることもあるから、来られた時に確認して。(本人には)見えてるかどうかわかんないですけどね。

看取りは、(担当職員や親しかった職員は)もうその人とずっとそこにいたって、いいと思うんですけどね。何するでもなく。そう、何ってわけじゃなくて。一緒にただTV見て「これ好きだったね」とか。

(入居者が亡くなることが)続く時は続く。結構、空き部屋ができたりして。そうですね。なんかね、何にもなくなると、何かからっぽの部屋みると、すごい何だろな、家族でも何でもないんですけど、やっぱり悲しいですよ。悲しいし、何かちょっと空しいし、やっぱりもっと何かやってあげられることあったんじゃないか、もっと何かできたんじゃないか。誰もそういうのあるんじゃないか。ただただ寝てるだけだけど、何かあったんじゃないかって。例えば手浴してあげるとか、毎日クリーム塗って乾燥防いであげるとか、細かなことですけど。

(亡くなる時間は)結構(夜中の)1時とか朝方とか。大体みなさん潮の満ち引きとか満月とかありますね。ありますあります。ぴったりはないですけど、だいたいこのくらいの時間かなっていうの。「きっとさ、1時～4時の間よね」とか(職員の間で)話したり。私も何件も立ち会わせて頂いたんですけど、昼間に職員がいっぱいいる時っていうのは数えるくらい。2～3件くらいだと思います。だいたい夜中。

亡くなる前って、ちょっと匂いが変わるんですよ。お部屋の匂いが。要は体臭ですよ。うん？って思うと、もしかするとって思うと、その日の夜だったりとか。あとは何も食べなくなると、アイスとかプリンとか口でも入ってたら別なんですけど、本当に全く何もなくな

てから1週間とか10日とかの間でだいたい。

あとはおしっこが出なくなるとか。あとは急になんかこう饒舌にしゃべってたりとか。“全く食べないよ”が続いてたのに、その前日、急にバクバクとか食べたよと思ったら、その次の日とか。“活気があるね”とかなると、その次の日とか。だんだんとやってるうちに、もしかすると…ってのが。そういう日は（職員の間でも）「すぐ電話してね」とか「携帯の音量マックスにしとくね」とか言ったりしてる。

何かそれも何て言ったらいいかな。ちょうど亡くなる時に立ち会える時と立ち会えない時とあるんですよ。巡視も1時間に1回でいいと言われてるんですけど、亡くなりそうな人ってのは、そのルールから別にはずしてもいいわけで。そこはもうあとは自分の考え一つなんで、15分おきとか30分おきとか5分おきとか。あと、もう本当に誰も呼ばなかった時（ほかの入居者から呼ばれなかった時）とかは、ずっと付き添ってあげるとかもありますし。最後「ありがとね」って涙一つ流して亡くなった人もいますし。そういう方もいましたし、たいい息をひきとりますって時、誰かしら呼ぶんですよ。ナースコール。だから付いててあげられるかって、付いてあげられないことが多いんですけど。

だから例えばすごく手のかかったおじいちゃまおばあちゃまであっても 最後そうだったら、私は個人的にやってきたことが無駄じゃないって言ったら変なんですけど、合ってたかどうか分からないんですけど、でも決して無駄ではなかったかなと思うし。

何かしらやってあげてたことがあったっていうのは、まあまあ介護側の自己満足かもしれないですけど。ま、よかったかなって思う瞬間でもあるんですけど。ただ同時にもうちょっと元気だった時にやってあげられたことってたくさんあったんじゃないかなって半々くらい生まれてくる感情ではあるなとは。

結局、子どもとか青年とかじゃないじゃないですか。もう結局終わりがありきの人たちをみてる。だから終わりを病院で迎える方ももちろんいますし、ここで迎えるって方もたくさんいますし。でもその最後までを私たちが一緒に携わっていいんだって思える。ありがとって思いますね。最後まで一緒に…〈携わっていいんだって〉思いますよね。ご家族とかも最後ね、お仕事されたりとか、自分がみれないからもちろんここに入ってるんだと思うんですけど、それを一緒に最後まで。

看取りの過程は、認知症者の言動の分からなさや不思議さ、大変さとも違う。「ただただ寝ているだけ」で、喜怒哀楽も分からない。もはや困らせられるようなこともない。何を望んでおられるかもわからない。でも“あれ好きだったな”“これ好きだったな”というもので囲まれるように、その人の部屋を模様替えしてみる。亡くなってからも「もっと何かやってあげられることがあったんじゃないか」と思う。あるいは看取りは「何をするでもなく」「もう

その人とずっとそこにいたって、いいと思う」。これらは、これまでみてきた「やってあげたくなる関係性」や、「無言で、縁側でぼーっとしているような」「第一段階の寄り添い」の、ごく自然な延長線上に看取りがあり、その濃度が増している様子を示しているようでもあった。

“今日は食べなかったよ”，“今日は食べたよ”というのは、一喜一憂ではないかもしれないが、その人と介護者がどこか同期しているようでもある。死が近くなってきた時の匂いを感じとったり、潮の満ち引きと身体の状態との呼応も感じながら、感傷的でも事務的でもなく、そこで淡々と働くことが染み込んでいるようでもあった。

手浴や毎日ハンドクリームを塗るなどは「細かいこと」かもしれないが、少しでも心地よくしてあげたい。少しでも傍にいてあげたい。ついていてあげたい。そのように仕事と言えば仕事であるだろうが、どこか引き込まれるように、そこに気持ちが向かっている様子は、単に「仕事」といったことだけでは説明のつかないような、「業務」を自然に超える何かがあるようにも感じられる。

看取りの場面についてではないが、語り手は入居者との関係を、

「家族じゃないけど、家族みたいな。もう一つの家族、みたいな。やってあげたい気持ちが生まれてくる」

とも語っていた。“仕事”と言えば仕事であり、どこかラインは引かれているようでありながら、相手に自然と引き込まれるような感じは、まさに「家族じゃないけど、家族みたいな」関係性の表れということなのだろうか。「生まれてくる」は、外側からの強制や義務感などではなく、関係性の中で内側から自然と湧いてくるものであるだろう。それがまた相手との関係を紡いできたようにも思われた。

「何をするでもなく、ただ一緒にいたいと思う」ことと「少しでも何かやってあげたいと思う」ことは、“being”と“doing”で、ある種、対称的なようでもあるが、介護という営みにおいては、「ただそこにいる (being)」中で自然に湧いてくる気持ちが「少しでも何かやってあげたい (doing)」になるのかもしれない、この二つは分けられるものではないようにも思われた。

### III. 考察

#### 1. 「老いの過程」は「自然現象」

語りからは、「老いの過程」で起こる様々な事態の対処に、日々試行錯誤であたりながらも、「老いの過程」が進んでいくのは自然なことで感得されていて、その時々を感じながら、何かしてあげられること、とにかく一緒にいることに、喜びを感じている様子がうかがわれた。そのように感得されていく内実や重みからは、心理職が「老いの過程」に寄り添う際にも、学ぶべき点が多くある。

「終わりありきの人たち」の確実に弱くなっていく姿を当然のこととして、それを認めたくない

という気持ちも受け容れながら、もちろんイライラもすれば、こちらも怒ることもあり、“時間がない”というジレンマも抱えながら、相手にも自分にも「まあ、いいか」と、求めすぎることはない。このような、どこか肩の力の抜けたようなスタンスは、どこから来ているのだろうか。

杖を振り回して怒ることもあったというBさんについては、こんなエピソードもあった。  
(Bさんの怒りに対して他の入居者は)たぶん自然現象みたいに思ってる。わーって騒いでも、“今日は風が強いな”とか、“雨が降ってきた”とか、みたいな。すごいなって思って。別に普通にしてる。部屋から出てくると、まず近くの席がEさんだけど、Eさんもちゃんと返事してる。無視とかするのかなと思ったら、そうじゃなくて。(怒りの声を)聞こえないようにしてるというのではないと思う。すごいなって思って。職員の方は、Bさんが出てくると、ちょっと(身構え?)ちゃうとこはありますけどね。前は棒振り回したりとかもあったんで。

Bさんの怒りを、風雨のような「自然現象みたいに思って」いたという入居者。この「自然現象みたいに」という表現がとても興味深く思われた。

Bさんの怒り方は、Bさんのもともとと気質もあったかもしれないが、加齢に伴って感情がコントロールしづらくなったことも関係していたかもしれない。

「老いの過程」は心身に様々のままならない変化が生じるが、「老い」とはそもそも「自然現象」のようなものとも言えるのではないか。その「自然現象」に対して、入居者たちは、嫌だとか困ったとか、何とか対処しようとするのではなく、それはそれとして、そういう時もあると、そのまま受けとめ、応じている。老いを「自然現象」のように感じ、「自然現象」に対するのと同じように、とりたてて騒がず「普通にしている」。高齢者がみなそのような受けとめ方をするとは限らないし、これが人生経験や加齢によるものと断じることはできないが、その泰然自若とした様子は、語り手が「すごいなと思った」ように、どこか高齢者ならではの厚みがあるようにも思われ、ままならない変化を、高齢者がどのように見定め、つきあっているかの一つを示唆しているとも考えられる。

こうした入居者の方たちを語り手は「すごいな」と言っているが、これまでみてきたように、語り手の入居者とのかかわり方は、入居者らの「自然現象」への対し方にまさに通じていたと言えるのではないか。もともとそういう資質をもった方なのか、そういうタイプだからこそ介護の仕事を選ばれたのか、ユニットで働く中で身に着けてこられたものなのかは分からないが、こうした姿勢は、高齢者が暮らす場にとってもフィットしているように思われた。

## 2. 「自然現象」に対する態度

しかし「老いの過程」を自然現象とみて「普通にしている」在り方は、現代では稀ではな



いだろうか。超高齢社会の現在、「老い」は「予防」や「対策」の対象としてとりあげられることが多い。

「老い」に対する態度に限らないが、自分の意に添わない困難なこと、不安なことが起これば、何とか対処しよう。そうした事態はなるべく起きないように、できるだけコントロールしよう。分からないことは、明らかにすることが必要だ。それが現代ではむしろ「普通」のことになっている。しかし「100パーセントの『安心』がない中で『安心』を求めて心配すればするほど、際限がなくなってしまう」（伊藤, 2021）<sup>2)</sup> のもまた確かであろう。

解剖学者の養老孟司は「自然とは？」という動画<sup>3)</sup>の中で、自然とは「人間の意識がつくったものではないもの」を指すのであり、人間も実は自然であり、自分が自然であることの一番の典型は自分の身体である、と語っている。次いで、身体は自分が動かしていると思っているが、目覚めることも眠ることも、意識してできるものではなく、“ああすればこうなる、こうすればああなる”というのは意識だが、意識そのものは、実は自分で主導権をもってはいない、とも指摘している。

これはどの年代にも言えることではあるが、若い時は自分の身体は自分の思うように動かせる気でいても、年を重ねるにつれ、そうではない現実を突き付けられることが多くなるゆえに、身体は「自然」であると痛感させられるのが「老いの過程」とも考えられる。「老いの過程」は、本稿でも触れてきたように、身体的にも心理的にも、大小様々な、思うに任せぬ危機の連続である。しかし現代は、そうした「老いの過程」も、ともすれば自分たちの意識で「管理」しようとする風潮が強い。近年は「いかに社会に適応し、よりよく幸せに老いていくか」を問う「サクセスフルエイジング」の研究がさかんであるが、これは加齢に伴う心身の様々な変化を予想して自ら対策を立て、生活習慣を制御したりすることが、結果として「良い老い」を実現するという考え方（佐藤, 2014）であり、予想や対策によって、自分の意識下に「老い」を掌握しようとする動きとも考えられる。

昨今は「危機管理」という言葉をよく耳にするが、養老は先の動画で、そもそも「管理できない状況」を「危機」と呼ぶのであって、危機とは管理できるものではなく、昔の人は危機に対して「覚悟」があった、とも語っている。

そうした「覚悟」の意味を、あらためて何気ない形で教えてくれているのが高齢者であり、特別養護老人ホームのような場であることを、先に挙げた語りは示しているとも考えられる。もとより高齢者として、常に泰然自若としている訳ではないだろうし、本稿の語り手も、分からないことを分かろうと全くしていない訳ではなかった。しかし、不安をおぼえることはあっても、それが過度にはならない。そうした在り方が「楽しく」にもつながっているとも考えられる。

本稿でとりあげた高齢者の姿や、語り手の姿勢は、本来、何も特別なことではなく、虚心

に「老い」という現象と向き合うならば、むしろ「普通」のことかとも思われる。それが稀になっているとすれば、そうなっていることをこそ、問われる必要があるのだろう。

### 3. 「楽しく」に込められているもの

本稿の語り手はまた、こんなことも語っている。

「『安心、安全』って、みんなが思うのとは違うと思う。私のは“一緒にいるよ”“一人じゃないよ”っていうことかな」

ここで「みんなが思う『安心、安全』」とは「危険や問題が少ない状態」（管理できているとされる状態）ということだろうか。それに対して、語り手は“色々大変なことがあったとしても、一緒にいるよ”と、高齢者がともあれ人と確かにつながっている感覚がもてていることを「安心、安全」と語っているようであった。

伊藤（2020）は、日本語には触覚を表す言葉に「ふれる」と「さわる」の二つがあり、「ふれる」は相互的で人間的なかわりを表すのに対し、「さわる」は一方的で物的なかわりを指すと述べている。常に互いに互いの感じを察知しながら、双方向的に生成していく「ふれる」という営みは、まさに本稿の語り手がその語りを通じて述べていたことでもあるだろう。

ケアの場面で「ふれる」ことが大切なのは言うまでもないが、伊藤（2020）はまた、老衰死のように、自然としての体の摂理が終わりを迎える時には、人間の手には負えない「絶対的な遠さ」があるとし、そこで体の生理的な声を虚心担懐に受けとるために必要とされるのは「さわる」であるとも指摘している。本稿の語りでも、認知症高齢者の不思議な言動を「わからないですよね」と言われた時の感じや、亡くなる時刻は潮の満ち引きと関係が「ありますあります」と言われた時の雰囲気からは、人知では及ばない何かをそこに感じられているような感触があった。何人もの入居者の生と死に立ち会ってきたからこそのものであるだろう。しかし自然の「絶対的な遠さ」を感じているからこそ、ささやかな抗いのようなものとして、少しこちらに引き寄せたい気持ちが湧いてくることもあるのかもしれない。語り手は「ふれる」という人間的な相互作用の手応えを重ねることを矜持としていたようにも思われるが、「楽しく」には、そうした意味も含まれていたのではないだろうか。

### 4. 日常のかかわりと非日常のかかわり

ここまでユニットリーダーとして働く語り手が、日々「老いの過程」をどのように感じてきたか、その中で「楽しく」と言われる言葉にはどんな思いが込められているかを考えてきた。翻って筆者は、ユニットで入居者とかかわらせて頂く際、「楽しく」という意識はほとんど持っていなかったことに、あらためて気づかされた。これは何によるのだろうか。

そこで想起されたのが、筆者がかつてユニットで出会ったある女性の言葉だった。少しお話を伺ってお暇をする際、その女性はこんなことを言われた。

「外国の方とちょっとでもお話できると、嬉しい」

「ここは俳優さんもいる。私の国に合わせてくれる」

「私の国に合わせてくれる俳優さん」は、自分のことを思っ、時にユーモアも交えて楽しませてくれるユニット職員の方たちを指していたのではないだろうか。それに対して筆者は「外国」という遠いところから訪れる存在だったようである。

この女性に限らず、職員の方たちについて「本当によくやってくれますよ」としみじみと語られる言葉は、時に耳にするものであり、そこからは職員の日頃の大変さを感じながら、本当に気持ちよくやってくれることがどんなに有難いか、“これ以上何を言うことができようか”といった思いが感じられることが多い。感謝の言葉を直接伝えることもあるだろうが、ここでは「外国の人」である筆者に、「私の国に合わせてくれる俳優さん」という言葉で、その思いをそっと伝えられたのかと思われる。

この女性は、隣に座って滔々と一人語りをされていた認知症の女性に優しいまなざしを向けながら「賢い人だったそうですよ。でも賢い人ほど、おかしくなるのね。だから私は…。でもこれからはどうなるか分からない。どうなるかなって思います…」とこぼされたり、またある時はこんなことも言われた。

「背中が痛くてね。待つのがこんなに辛いとは思わなかった。もう老衰が始まってるから」  
そしてそれから数か月後。

「一から出かける準備を始めてね。できたらまたお願いします。十年前からね。あの頃は楽しかったけど」

筆者がこの女性と出会ったのは、この日が最期となった。

「待つこと」や「一から始めた出かける準備」には死への旅路のイメージも浮かんできた。こうした言葉に対して、一体何が言えるだろう。その短い言葉の内に「老いの過程」において何とも言えない寂寥や様々な感慨があることがうかがわれた。そのつぶやきをそのまま受けとること。そのまま聴くこと。それしか筆者にはできないように思われた。

もちろん、そうした中でも楽しい瞬間がない訳ではない。例えば「俳優さん」や「外国の人」という表現には、どこか機知やユーモアも感じられた。そうした小さなおかしみを共に楽しみつつ、その奥にある悲しみのようなものも感じることに、寂しさは寂しさのまま感じることも、「老いの過程」では重要なことかと思われる。そうした役割は、「外国の人」のように、時々訪れる非日常の存在の方が引き受けやすいかと考えられる。

介護職にある人は、「家には帰るけど、ここに来てる時は一緒」の日常の存在である。そこには「家族じゃないけど、家族のような」関係性があつた。ご家族と入居者には長い歴史があり、それぞれ相手に対する思いも様々にある。それを傍目で見ても、語り手もその時々、様々な思いを抱くようだが、一歩身を引いて、そこに立ち入ることはしていない。また看取りの頃に部屋を模様替えるのも、家族の意向を気にかけるなど、常に家族の気持ちも尊重している様子がうかがわれた。しかし、家族のように長い歴史はなく、入所されてからの限られた時間——十数年続くこともあるとはいえ——ではあるが、だからこそ「今、ここ」で、家族への思いも感じながら、ある意味、家族よりも親密になる面もあるのだろう。そのような関係性は「老いの過程」をじんわり温めているように思われる。

かつて老人病棟で「老人の話し相手のためだけに時間を提供する『遊び人』」を自認した精神科医で臨床心理士の山中（1991）は、それが可能なのは、スタッフが充実に、医学的管理がしっかりしているからこそであることを強調した。医学的管理はもちろんだが、その場がじんわり温められていてこそ、そこで漏れでるつぶやきをつぶやきのまま聴かせて頂くこともできていたのだと思われる。

## おわりに

本稿は、特別養護老人ホームのあるユニットリーダーの語りから、「老いの過程」とはどのようなものか、高齢者にとって身近な存在である介護職員の方は、どのようにそれを体験されているかをみてきた。本稿の語りは介護職員の体験の「典型」ではないかもしれないが、老いを自然現象のように捉える姿勢は、「老いの過程」について貴重な示唆に富むものであったと考える。また語り手は、自身の在り方を「教科書などとは真逆」とも言われているが、こうしたことは「業務」として表立つものではないにしろ、高齢者と日々接する中で、多かれ少なかれ、どこか感覚的に体験されているところがあるのではないだろうか。慢性的な人手不足が叫ばれて久しい介護現場ではあるが、その中で苦闘しつつも、高齢者との時間に何か大切なことを感じながら働いておられる介護職の方は、少なからずいらっしゃるようなと思われる。そうした声は、もっと耳を傾けられるべきではないだろうか。日々、高齢者と接し、生きることの基本を支えておられる介護職の方の体験を聴くことから「老いの過程」についての理解を深めていくことの可能性を、本稿は示したとも言えるかもしれない。その声を聴くことも、心理職の仕事の一つとさせて頂くことはできないだろうか。そこから日常の周辺にある者として、「老いの過程」に同行する一員となる道を、今後も模索していけたらと思う。

## 謝辞

日頃よりお世話になり、本研究にも理解を示してくださっている淑徳共生苑の林房吉施設

長に感謝申し上げます。そして何よりも、お忙しい中、何回にもわたるインタビューに快く応じて貴重なお話を聞かせてくださったユニットリーダーの石渡聡美さんに、心より御礼申し上げます。

## 注

- 1) 本研究は「『老いの過程』を共に生きる—高齢者施設での心理職の在り方に関する探索的研究」という題目で、本学の研究推進事業の助成を受けたものの中で行われた。本事業は、「介護職員へのインタビュー」と併行して、高齢者自身が体験している「老いの過程」を「施設入居の高齢者と箱庭を介したかわり」から考察する試みも行っており、後者については稿をあらためて報告する予定である。
- 2) 視覚障害者をはじめとした様々な障害者へのインタビューからその体験世界を詳細に描き出す著書を多数執筆している伊藤は、この著書(2021)で、「安心」と「信頼」は似て非なるもので、相手がどういう行動を取るかは分からないので、その不確定要素を限りなく減らしていくものが「安心」だとすると、相手がどういう行動を取るか分からないけれど大丈夫だろうという方に賭けるのが「信頼」であるとした上で、現代のテクノロジーは「安心」を求める方向に向かいがちであると指摘し、「思い通りにならないものこそ制御するのではなく話を聞かなければならない」と述べている。
- 3) 養老孟司「自然とは？」<https://www.youtube.com/watch?v=WOuVFUcmdfo> (2020年5月20日)

## 文献

- 林房吉(2018)「その人らしく生きるために必要な居場所の理解」『淑徳心理臨床研究』第15巻, 37～44頁
- 平野尊大(2018)「福祉心理学」福島哲夫ほか編『公認心理士必携テキスト』学研
- 伊藤亜紗(2020)『手の倫理』講談社選書メチエ
- 伊藤亜紗(2021)「思い通りにいかないことに耳を澄ます」福岡伸一・伊藤亜紗・藤原辰史『ポストコロナの生命哲学』集英社新書, 48～72頁
- 久保田美法(2020)『「老いの時間」を共に生きる—心理臨床からの試み』ナカニシヤ出版
- 西川勝(2007)『ためらいの看護—臨床日誌から』岩波書店
- 佐藤眞一(2014)「引退するところ」佐藤眞一・高山緑・増本康平『老いのこころ 加齢と成熟の発達心理学』有斐閣アルマ, 41-61頁
- 進藤貴子(2001)「エイジング・エデュケーションの試み」山中康裕編『魂と心の知の探究—心理臨床学と精神医学の間』創元社, 426-432頁
- 小澤勲(1998)『痴呆老人からみた世界』岩崎学術出版社
- 山中康裕(1991)『老いの魂学』有斐閣

## Having a Good Time with Elderly People on the Aging Process

From the narrative of a member of the nursing staff

KUBOTA, Miho

As one gets older, one comes to be able to do only with great effort or almost impossible. What elderly people then feel and think on the process? How do we accompany those people in their daily life? To find the key of this theme, the narrative of a nursing care staff is considered in this paper, who is nearby the elderly and might catch something very important about them in the relationship. Based on the above narrative, it is also discussed how clinical psychologist could be with the aged in the nursing home.